農家益

地

番外書册

和書門
類 一六八二七
號
函 二一八
架 八
冊 六

内閣文庫
和書
類 一六八二七
號
函 一八三
架 六
冊 六

内閣文庫
番號 和 16827
冊數 5 (2)
函號 183 259

動植品物

国立公文書館
National Archives of Japan

農家益地之巻

櫨樹總論

五畝の宅樹は桑とすべしせで五十本の桑を植
て蚕を養うべし百畝の田は桑を養うべ
し人口の家糸はなくしてかいこの
ごとく物半塩よりけうしべ結ぶし漬よいく
末を裁るを用とす十年の後ようして十年斗
にして益有るかごとく極の本を植百年ど

浅草文庫

うゑ初めて初く裁芝て五枝の大なる蕪と
なりし美味なること丘陵曠野を加海なる僧の
城屋の庭柳を植てと夏日蕪とかくがごとくは
緑濃風そぶしく秋を清水よりなべて紅葉し
そを実はたさわ益と見く後藤茶とは少く窓
明らけし去て湖二月花そよ芽を出し梅の蕾
芽しくを利とひるとたよくしく述ぶ
ぶし杠樹のごとく伐て再桜なりのと差ひて

伐て接樹し実よ蕪さ桜とをどもの能育て用を
わ成半菓樹小勝るとと大ろて淮ら栽ざしんや
紅梅の枕ら生育せびしんや寺樹茶木して
実よ天の湯し湯ぐし

梅の木実よ植し矣

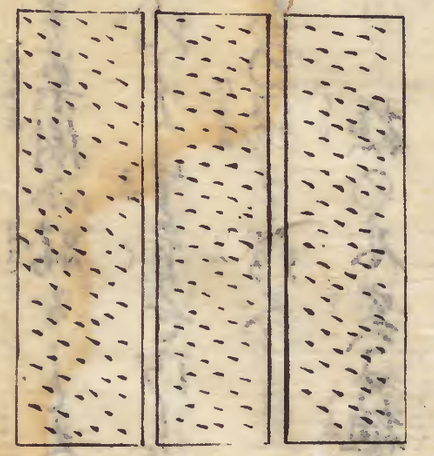
芝彼岸より十日ら梅花桜と白して橘ゆひ
大て西し肉を去ら実をしら桶ゆ目水に浸
し水けだけ見ぬとてれ出し歯して嗜ゆ

紙巻へ関かるべきこと

試みに和らかなりて種子の口を開くころ
紙巻に揚水を注し先乾地の上畠の地ホ地を
なしまた焼灰を小便とうけ色よく乾し

○けだしこれ敵対の義なり
○江方へ大垣ととべし
○小麦をよく搗くべし
○蒔いてたちまち色
だんだんとまだ
みひろげ色べしてあ
ひてまたまた用ふる

苗床圖



右圖はわく巻色ど遠くよ苗を生ぜしむ苗
よて産の巣とし塗元ふ六寸になり須木の茎と
茎に挿ぬ毋りよ小便とうとく水を加へ色ど
を〜茎ようとも木枯〜左五六月より先
見合うだ〜砂よ肥〜とぐ却ら木枯福
ゆ〜ぐんを用べし

種子撰〜無

稗〜よいろ〜医かわり丸実安留播乃元

小川 田中 吹上 松山等の七種を筑前筑後
豊前豊後にて栽る処乃樹接はして國よりてハ
名と変るべし 正内 松山種を元よりたつしを
筑後國生葉郡亀主村に元安元年に石谷村に
根之接也月毎 持山のうちに松山しといへるを
收納のよし
はなはだ長しなる樹のうちに株實大にして種よハ余の
種のようにふくらまず房葡萄のようにまばらに
ちり接ひろめ少し淮云こふく松山と号國中へ

不及云九州筋新かりる実植ひろる此松山種なり
直接と余の実しハ唐目を行して八屋ぐさも
ちり直なる安富本を実れ生ず敷ちよりもでも
筑紫に因りちかべ生ずべ畑の境まさを畑中
よりまの種をいぼれ地ちりくも接嫁ぶ
○中房見て中に大粒の種だりもでくしてひさと
苗ちりでこ一二枝を弐拾年ちと二拾年程
なる大木ハ生ずるの房を実大さくしも

中はたゝかはたゝして膨肉とくぶくと肥たる
実を結ぶなり人ゆれど疲ゝ畑より作りて色黒く光南
粒大なるかの山にて撰べし木にて是を造るは
武拾年月ごとに枝を枝さく房大さく盛なり
木は房と実とを結ぶ故に是を栽べし

苗生立初年之圖

雄木雌木見分ける仕方の事

苗家は肉もとくに延びるを男木多し尤苗乃
芽先葉の裏表より白赤き毛有るを木の
白肌なる色男木の悪木とゝなるべし此木至子
の肉より乃ち別細なる尺ゝす此人かしるとゝみ
五の月より栽替て二年目三年目は芽より萌
て接木の義木より栽とゝべし女木い延方は色男
木はまたゝ五より此方延る葉と黒く

男木樹容
葉付之圖

おしく花をたべて
をくらうべしば行と者
男木女木とりあかて

女木樹容
葉付之圖

国立公文書館
National Archives of Japan

勢よくおしをおさく長く光澤く本末共よ
等つて木肌を虎斑として芽生ふこと等雪さと
女木と人工ならずして是も利畑の間に天かど添
地に植えるゆゑ肥培しつゝはなはだし
一畧梅の葉まさい椎れ葉のごとく青色葉青
ちのこれ極上とゝ云べし名後変生れ物有一概に
はゞからず
一男木を梅延よして根に半唐れ筋根皆

まさとゝに年月よくふる度たるに花の咲ること
大きく長く剌く見えば黄色にして用ゆべ
菜種のごとくなれば
一種よりたちて見るゝに初水優とは
凡二十余日にしてくき半宵ゝ成て内は芽
にゝを付見べし発育延出ると男木
おそれを女木ゝと云べし
栽内して此須梅を栽ゆゑ此見分なく樹の

好悪れ芸れなさ方いとびくるよ勝まぐら
ふを載るゆ人ゑ室の費のくとゑんこ元来
を所くれ北以より沖根宵屋くゆ下和方屋と
類或しまり生活ゆ技不服縁より雷乃
芳をるとゆ冥加るこほたりこれを用ゆ
利の屋うん事のくを歌るり悪矣の技辺ゆり
を利れ慶大して歴く方の沙勝ゆれ直と
狂れをのるまば生活しく載法むべ

載方れ見ゑ五弁 載稲ゑ共

一湿地ゑし 一水落あ〜 一真ち 実入稲〜よ〜 但刈れ蓋ゑ悪

一河原の元 実入中し下 一黒ゆち 実入中 水盛ゑ中

一山附の畑く畠の岩よこ植てよろし岩下悪

一野地ゑゑを行堀つく載ゑ〜 む麻の根ゑ深

深く堀ゑゑごろれるを多く入元のわく九を刈

ゑ元一番うりく後枝ゑ元方を少向て載〜

一風れ吹通ゑまよ山漢ろ〜

一山林の側に栽べき所に味悪しき所を去ほりて塩を加へ灰を加へ中に水と入土を塗るべし苗木は根をのこして植るべし山林の所に深だしき根は石を重ねて根を深く入るべし家の廻りに盤根と大石の基よりセて植るべし但し木の枝ばかりを植べし

個人蔵

畑地八

畑の境に栽べき

一畠又は荒畑栽べき所

圖のごとく五の月に栽べし

一反に弐拾八本

或は三拾本植べし

畑の境ごとに栽るは三間半宛に元根

又は竹ごとに植てよし

山林に又は拾貫宛に七百本代に栽べ

個人蔵

国立公文書館
National Archives of Japan

右根の木植えうるなの中へ楮の木を植だし

根畑之中作物はゑ

一稗　上　一粟　中　一菉小豆　下

一大角豆　下　一麦大豆　下〳〵　一大小豆　上〳〵

一菜種子　上　一油菜苗　上　一煙艸　上〳〵

一茄子　上　一木綿　中下　一琉球芋　上

一里芋　上

右肥壇と紙と紙と園に花庵物買ひ人年人だし

根苗木芽留枯〳〵ゑ

たとへば弐年目位ゑ七七分程枯し伐拾ひ解よりの

追〳〵に芽を出し横よりびらり張り繁茂をえへ

る留ゑ七六尺余に延る木なれば未弐人ゑ

伐拾ひだし

但し拾切にして切口に小疱とうくだし

一他おどゑ切口破て枯るゑ

る留下留〳〵圖

肥培禁好し矣

肥しれ過しれ所を惟根源を欲して塩和げ艸
まさに葉屑英ちしるをおし入重てようたぐうち
ちらしげたるごとくうとうび保肥しをする
ぞしけいれ盛長をとろし実のせうるも匿
むをえげり幹根と塗手根先を欲して切く
こをえ変こうを毋と入るり組をれ彼岩より土用
中よ肥培をべしこと後へ肥しよ及ぶ年中に云

を殺してよく唯木の性小油ひき養生とり木
と考肥しとりかて
一選い法水れ悪きを除よけりとべ木の根を和る
米糠ひたしたれい米指れ物と所々を抜木の根
と和辺大小ひたしたるべ摘て引抜て完よ油糟を于
鰯してもおしへ入を浸ひ置べし大木の地りとかしら
るれい引抜べ
一人糞一弱糞一干鰯一英れ焼灰
一油糟一米糠一菓一艸

一溝泥土一小芝屋
右いずれも肥しにすむ根を生けど木抜ず根と
おし塗て埋だと木れ大小ようて多り見合べ
一山中とても肥しをしても絶ねのことなり拵も
ちなれよ武百行ありひい二百行生る山ありこれい
地厚く土味よくうちよりひ生よ肥しとなれ物
と下し舎歎集群る屋自然と肥し有少ふる所
根と和和げても地味よろしいなべ肥よ及ぐば

国立公文書館
National Archives of Japan

蠶蛾

蠶蛾は六七月の頃葉を食ひて医師捨て食べ木を食ひ入るるを小虫出たるを揃えて又は枝折て去べ一枚明り火と灯し本れ根本よりたべ〳〵出る火の側より充集るを変を別の枝明りを焼るもよし一蛾は木より出るを吟味して足と云るもよ多背脇より沙を入焚て葉葉よりて木の根より少し上に引まゝひ乾し一月数遍く乾ばまゝ

ぬりてゝ尤五六年月より大木の古枝のゝ
ゝへ沙色うべ又ただ出れ豆とあり滑し出け
根より出てもよし海辺の葉と根よりまとひてよ

接穂

一云彼岸ちより十年ぬ又十ほ五年月れ接る法
葉へ実のうれた木れ南へさしたる枝を取べ
彼岸中へ方と撰べ己ていわのと上除れ枝をえ
老木れ枝をべうべ接をえて望る近き枝

春
梅接木

ひるんの
芽ぶ
ほぐかしあ
去のはぢ種

かつ葛之圖

つきかたしろぐき
椄穂丁子大木

卯月より接ぎ

元禄取穂寸法

打ちたてとぐふ桶より水を入れ

天木のほぞ　あまのほぞ

ほそみのほぞ　ほそみのほぞ

接角こく板

接本れ場わり

去波岩より土用を

土用末よりこと年の宵頃よりて芽はころび

こて穂しに波岩より接初てよしこころびとぢ

てハ付らぐ之事わり

菱土用中

紙木ゝはちぐひ菱れ去用を接角の元よしく

秋土用　かぐさたけ去菱接ぎ秋ハ付らるもの

接はしこと毋くはぢうくべし

接植実なりて見るよし

接夫こく利法

接人ハ者去十八九より二十ヒ人オをこく無数

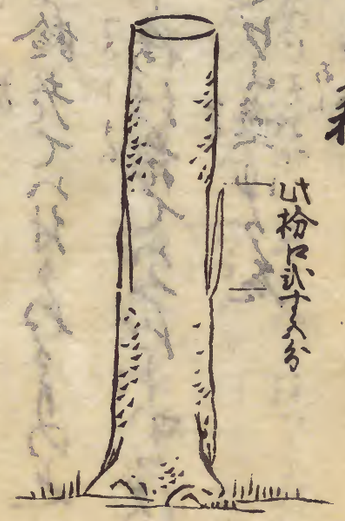
者と接こ接こぐ年齢老てハ付らるもの也

一接ハ日ハ酒と接ぐべ接は接てハぐしいらぐ

これハ接植を拾て日を遠ゆる名

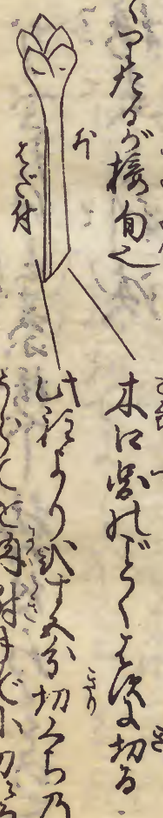
口中に酒ぬ有てハ悪し

臺樹枡板こしらへ見積



幹の木肌と麻皮
しのろを小刀にて
引すえ方かど枡之

小木接穂こしらす法



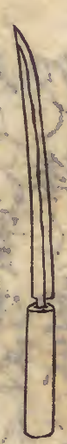
ひごこく綻こつたるこ接角之
枝長サこすこ方ほ

大木接穂こしらす法

枡ごらこす

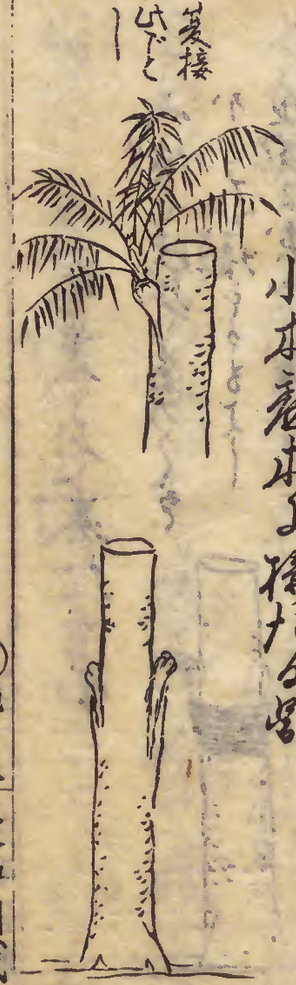
小木の接穂よりるこ

小刀こしらす

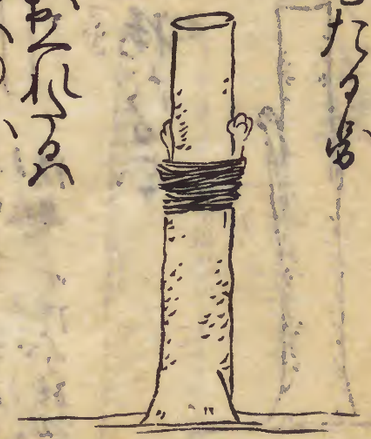


双の長サ一寸五分ほど
清水にて洗切を用

小木麻木より接たる図



同葉にて巻たる図

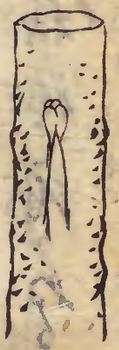


人低くはぐれ葉のうへ
うどにて培ふもよし
但芽より出るをよし

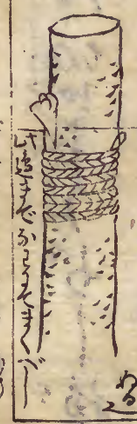
大木にて實生おのれなる
切て接ぐ歳木の図

渚木と矣うして
枝にたる物也
切口にて接ぐ

大木接植真向の図



同縄にて巻たる図



同接にて巻たる図

同横にて図

圖のごとく縄にて巻接にて入たるこゝろ縄の
ようを深きりはなれ生てめるだし大木は縄にて巻
小木はこゝろにて巻
これはいぼとの木にても接木にて扮口蝋にて
樹液にて接て接植を接次半わくこゝろ初るべ

一本の丸太に植を差込接しに常よりは西風をよけ
所なきゆへ西の方へ接ぎ込むべし
きゆへ東しなぐ竹を立て西へ斜に接かり
たかけとべ西風にて吹裂かり むべ風しなりまるゝはゆへ接に
一惣体切にしかし植と斜に接ぎ込し扮に
の真中より差込わべ木は肉よりもとゝ又は脂小蕪
を植て植て掛るものなりおし斜にしし
む小枝又を小枝るゝべ真中差入接ぎ込し

一扮にの扮に植を沈に並べ接ぎ込し
一接留て即日菓子を慶とし

一接たる日より五日目の内雨降ては十日の内
こなれは付りなし漬て五日和を見あを接べ
一よて慶の菓は迄ふ丸抜ぎし

一蓋木は切口を上より出し芽を出すものを悉く欽
拾べし 惣接種の上に出し芽は枯るなり
こしは蓋木の切口より枝下五六尺足限りは枝
留り用まて強方の術なり 傳
一去接したる木は翌年花用中より接だし 傳
一接たる木は翌年実なるものを来年一ヶ年は
こゝを実を先に拾だし
一去接こゝを小い丁度元に戻り迄よなるかと

丈を六尺切ごとに延び枝も茂く枝に芽出る
なり 蓋木小木ともに
これを準じ試べし
寄接くべ矣
実植の内男木は利物に植まし無なると云
接種せんと切り木は傷に裁元元元元
おして伐て接種樹の根を掘穿げ木を斜に倒
枝は縄を下へ編先下になりるまで枝は木り

桃を以て砧木にして寄接

六月八日

慶長

寄接之図

砧木と切接台のごとく接留よく付て後切もよ

一山寄接い付立生てく湖密なりしかて宵場を

地しばらく悉く年を迹ざし

一松山の実を接ぐんと思つで新ふ根の木を仕立山

場所まそい出来ばりの左先松山の苗を求先栽

自写愛清分よ植垂に年立後の成り母男木の

二年目後成と傍よ枝年栽く形松山し枝と接丸

ばしむ初立方は苗を求多半大成なりもども後

国立公文書館
National Archives of Japan

は莫大の益有かつを

梅の実を用ゆ

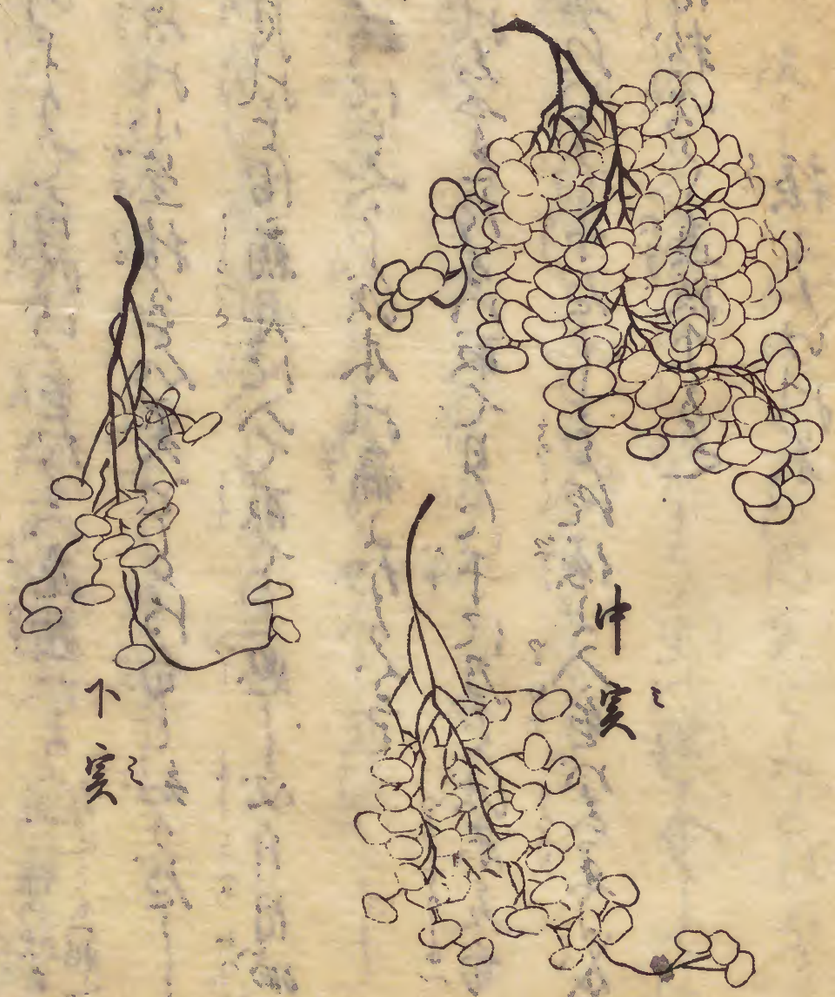
一竹の弐間棹子　三挺　一同　二間棹子　三挺

一細引　三筋　一腰付鎖　三

一末の鈎　三　梅の実九月旬こ半

実よハ九九十月よれ黄色に成て後り

こと茶色に成ならん順の熟し終こ黒色ふ有り



雛のようて白粉の色なるハ病熟なり　是と蝋の吹出なるとを云ハ也

一又房れ小豆拾るとん実とを白と知るべし

十月廿日霜月に入て取てを悪し必ず月減

一枝折にとぐるべし水れ痛よかるべ

一実れ去るとたるハ取て日に干に及べ赤る白

くあるべ干だしを後に入置べ長く

て白粉吹く直腐下る

柿まけれ茶

雨の後まさハ乾るべ内実をとるべ

柿まけして漆瘡に拾なり生れ雛を食して上

又雛節を煮て洗て含てもよし

一紫蘇　陳皮　香附子

右之味当分にして拾せんで用ひてよ

一薄荷を煮て洗てもよし

一生蕎麦の葉をとりみすりすて上

一栗の花黒焼よして胡麻の油にとかすて上

一大根の行るゝけを付てよし

一山椒の皮を剥ゞ洗てよし

椒細の中に入るゝ迄を沖をおしぬきて

入もよし

一本付若悪よりを生実多わゝ半

一たゝへゞ椒本百本ゝ用　よへとよく結る

拾五本　弐百行より三百行を生

拾五本　百行余

ゝ拾本　五拾行余

拾五本　ゝ拾行余

一歩均を百行余

右者大体ゝ記ゝ書記ゝ結なり椒の接方初る

八ッの法有然ゝも来繁く都ゝ知ゝ是一ヶ條を

挙るのゝ也國所の水土地理よりて一概の説も

立がゝ此を部の類を考解して而ゝ

相應の理を考ゝ為らゞ先人未發の理とも發

明あらべし対よ我内へ比其実よして厚く
生植十分に地かとべ穀よ新化よ勝蓄積こ理
方べし中文業紙よ高紙さ面変長変のごとれへ
高こし方へも紙今紙く性変技ヤだし
勿論一紙生紙こ東備と清帝蓄紙布せ今
帝而已

農家益比し古紙

大蔵永常

地廿七 受和園蔵

国立公文書館
National Archives of Japan